

## 館藏品から⑤

南城一夫(1900-1985)

《赤兎》

1935(昭和10)年

油彩・キャンバス

高19.9×幅25.1cm

珠玉のような絵画という方がありますが、南城一夫の作品には、そう感じさせるものが多い。この作品も、大きさや色使い、緻密さ、そして画面から受ける、対象に対する作者の深い思いなど、まさにその言葉がぴったりと当てはまるようだ。

南城はそれほど広く知られた作家ではない。その原因の一つは彼の極端な「人見知り」にあった

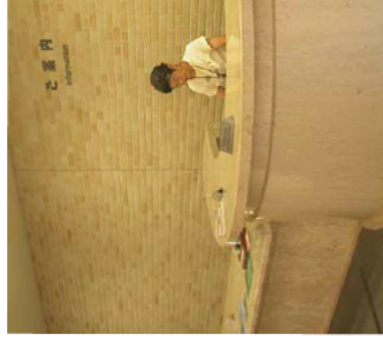
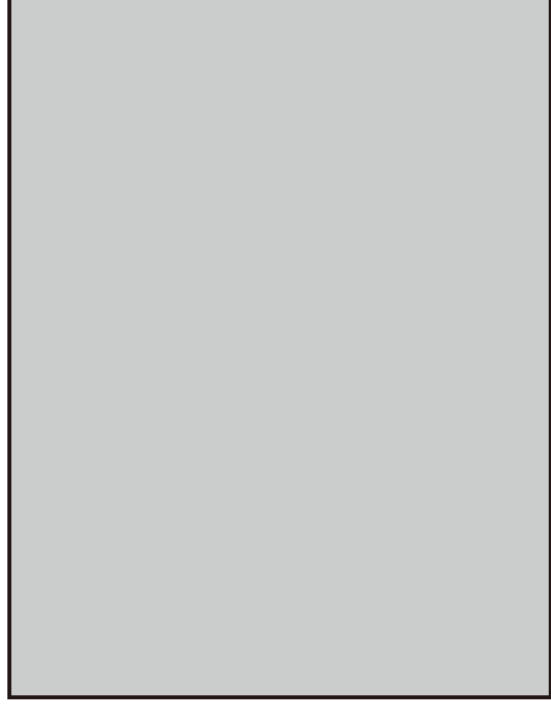
## 美術館ボランティア「櫻の会」について

津駅と三重県立美術館をつなぐゆるやかな坂道に並ぶケヤキの木々は、季節毎にさまざまな表情をみせ、美術館を訪れる人々の目を楽しませていきます。当館では、このケヤキ並木にちなんで、「櫻の会」と名づけられたボランティア団体が活動しています。今回は、開館当初から三重県立美術館を支援し続けていたこの「櫻の会」を紹介してゆきましょう。

「櫻の会」誕生は、美術館開館のほぼ1ヶ月前の1982年8月26日。美術館ボランティアがまだ現在ほど一般的でない頃から手探り状態で出発し、試行錯誤を繰り返しながら活動を続けてきました。現在は、82名の会員が在籍しています。会員は、A部門(来館者サービス)、B部門(文献資料整理)、C部門(会員の研修・親睦)のいずれかに属し、部門内で活動内容やその具体的な進め方等を検討する一方で、受付、団体案内・誘導、資料整理等すべての活動に携わります。この活動を円滑におこなうために会員自らが記入して完成させる活動表に

らしい。東京美術学校在学中にフランスに渡り、12年間滞仏。帰国後はすぐ郷里の群馬県前橋に引きこもり、所属する春陽会展のほか、いくつかの展覧会に出品するのみだった。しかも自分で積極的に美術界に出ていくとはしなかった。作品数は、自ら「私はもともと寡作の方で」と語っているようにいたって少ない。その上、第二次大戦までの作品の大半が行方不明となってしまった。

この作品は、フランス滞在中のもので、数少ない比較的若い時代の作品である。パレットナイフを用いた画面は、当時の彼の技法を伝えている。周囲の人物、花や風景などを、温かい目でじっくりと見つめ、愛情をこめて描き込んだ南城の画風がよく伝わってくる。(Sm)



受付



会議風景

性にあるといえるでしょう。ボランティア設立から22年。組織化されていながら、一方で自主性、自発性を重んじるという複雑な状況が、これから先さままざまな問題を生む可能性は否定できません。また、日本の美術館を取り巻く状況の変化にも無関係ではいられないかもしれません。それでも、「櫻の会」はこれまでそうであつたように、それらの問題に冷静に対処し、さらに成熟した組織へと“しなやかに”進化を続けるのでしょうか。(Mm)



朝の車いす点検